

泥

沼田
水野
岩本

客入れ

照明 暗転

舞台上、パイプ椅子がたくさん置いてある

照明、舞台全体

沼田、登場

パイプ椅子の一つに、背もたれを前にして、腕を掛けて座る

沼田 夜中に目を覚ます。冷たい空気が部屋に居座っていて、自分と部屋の温度の違いにたじろぐ、自分の鼻先が妙に冷たくて、ああ、ここが部屋と僕の境界線なんだと実感して、僕は冷たくなった鼻先を嬉しく思いながら、また眠りに就く。
ふと思う。僕は本当に眠っているのだろうか。
この状況はいつから続いているのだろうか。
僕は今、ベットの上にいるのか、それとも立っているのか。逆さになっているのか。
上も下も、右も左も分からない。
身体と実感しているものは、身体なのか。
朝日に気付くこともなく、埋もれるように眠っているうちに、部屋の温度は上がり、冷たくなった僕の鼻先は、いつの間にか部屋と交わりだす。
僕は意識を取戻し、目を覚ましたことを認識する。
僕は今、ここにいる。

音楽

水野登場

水野 こんにちは。
沼田 あく、こんにちは。
水野 あれ、岩本さんは。
沼田 まだだね。
水野 珍しいですね。
沼田 そうだね。
水野 ∴
沼田さん。

沼田 何。

水野 しりとりつて知ってます。

沼田 馬鹿にしすぎじゃねえ。

水野 最近しました。

沼田 ∴いや、してない。

水野 しません？

沼田 ∴しない。

水野 ∴ちよつとした疑問なんですけど、何で、しりとり、つていつたり、リンクつて応えるんですかね。

沼田 ∴

水野 しかも、大体その後は、ゴリラですよ。さらに、ラップですよ。

沼田 パンツ、いや、パンティーかな。

水野 それは、嗜好ですね。沼田さんの人間性です。

沼田 そうなの。

水野 そう思いますよ。

沼田 パンティーつて言うでしょ。

水野 言いませんよ。始めてですね。パンティー持ってきた人は。

沼田 あ、そう。パンツ派。

水野 パンダ派です。

沼田 あ、なるほど。

水野 ∴忘れてください。

沼田 何かさ、ふとした時に思いたしそんな話題だよ。しかも、頭から離れない系の。

水野 じゃあ、考えててください。で、わかったら、教えてください。

沼田 うん。

∴

水野 沼田さん。

沼田 何。

水野 考えてるんですか。

沼田 うん、∴考えてはいた。

水野 何ですか。

沼田 何でだろう。つて考えてたら、何でだろう、何でだろう。(ハッ&トモ) つてなつてた。

水野 考えてないつてことですね。

沼田 そういふことだね。

なんでだ、なんで、のところで声掛けられた感じかな。

水野 　　：

沼田 　　：

水野君。

水野 　　何ですか。

沼田 　　無意味なことを考えるのは、無意味なんだろうか。

水野 　　：：どうなんですかね。

沼田 　　そもそもが無意味なことだったら、それに対しての疑問自体も無意味なことだ、更に、そのことを一生懸命考えるのは、この上ない、無意味なことだよ。

水野 　　まあ、そういうことになりますね。

沼田 　　今ここに、君と僕がいる。

とつても無意味だつてことだよ。

水野 　　：

沼田 　　この、「前向きになる会」って、何だと思っ。

水野 　　：

沼田 　　疑問に思つたことない。

水野 　　：：ないですね。

沼田 　　俺もない。

水野 　　：

沼田さんは、何でこの「前向きになる会」に入ったんですか。

沼田 　　後ろ向きだから。

水野 　　見えませんよね。

沼田 　　そう。

水野 　　ええ。

沼田 　　こう見えて、結構後ろ向きだよ、俺。

水野 　　そうなんですか。

沼田 　　そう。

水野 　　例えば。

沼田 　　例えば、この椅子とかね。

椅子を見ると、こんな風に座りたくなる。

水野 　　はあ。

沼田 　　丸椅子なんて、悲惨だよ。後ろどつちだよ。つて。

水野 　　：

沼田 　　そんな感じ。

水野 　　何たる。沼田さんつて、腹立ちますよね。

沼田 　　そう。

水野 　　他には、どんなところが後ろ向きなんですか。

沼田 　　そうだな。

何で生きていかなきゃいけないのか、わからない。

水野 　　太宰つばいですね。

沼田 大宰の言葉だからね。
水野 ∴
沼田 俺思っただけだし、
後ろ向きな人って、むかつくよね。
水野 そうなんですか。
沼田 周りにいるとさ、不愉快でしょ。
水野 そう、ですね。
沼田 十分、俺が後ろ向きなのが伝わったでしょ。
水野 今の、「どや」って感じが最も腹立ちますね。
沼田 水野君はどらなの。
水野 はい？
沼田 多分さ、俺の周りの人は、俺に腹立ててると思うんだよね。
水野君は。
水野 ∴
腹立ててるんでしょうね。
沼田 後ろ向きを、笑いに変えるつてのが、岩本さんの想いだと思うんだよね。
水野 それが、「前向きになる会」つてことですか。
沼田 わかんないけどね。
水野 ∴
沼田さんつて、結構まともなんですね。
沼田 まともじゃなきゃ、後ろ向きになんて成れないでしょ。

二人、舞台中央
沼田、逆立ち。水野、支える
逆立ち、終了

沼田 ありがとう。
水野 いえ。
なんなんですかね、これ。
沼田 わかんない。
水野 まともなことを言ったら、逆立ちしろつて、何か意味あるんですか。
沼田 わかんない。
でも、決まりだから。
我ら「前向きになる会」は、まともなことを言ったら、逆立ちすべし。
沼田 で、水野君は、何で「前向きになる会」に入ったの。
水野 後ろ向きだからですね。
沼田 どんなんところが。
水野 全体的にですかね。
沼田 ∴
水野 何ですか。

沼田 そういえばさ、結構、お互い、知らないよね。
水野 そうですね。
沼田 結婚してるの。
水野 してないですね。
沼田 一回も。
水野 一回も。
沼田 彼女は。
水野 いませんね。
沼田 俺、見たことあるよ。
彼女といるとこ。
水野 ……
沼田 上手くいつてないの。
水野 そういうわけじゃないですけど、
沼田 けど、
水野 人は何故セックスするんですかね。
沼田 人間だからじゃないかな。
人はともかく、人間にセックスは必須。俺はそう定義つけてるよ。
水野 心はいらないつてことですか。
沼田 うぶだね。
水野 そうなんですよ。考えたこともなかったんですけどね。
お目前にして、恥ずかしい話ですけど。
沼田 ある意味、微妙なお年頃だからね。
人間に心は付き物だよ。
水野 なるほど。
沼田 他の動物は知らないけど。

岩本、登場

岩本 ちつつす。
沼田 お疲れさまです。
水野 お疲れさまです。
岩本 ちつつす。
沼田 今日も、挨拶だけは前向きですね。
岩本 ちつつす。
水野 俺は無理ですよ。
岩本 ちつつす。
水野 無理ですつて。

岩本、椅子に座る

沼田 岩本さん、何持ってんですか。
岩本 あく、目拾ったんだよ。
沼田 目。
岩本 そう、目。
水野 それは、あれ、目玉つてことですか。
岩本 そう。
沼田 へ。
水野 ；
沼田 珍しいもの拾いましたね。
岩本 でしょ。
水野 リアクション、薄すぎませんか。
岩本 歩いてるじゃん。まあ、歩いていることというよりは、スキップ。
水野 歩いてないですよ。
岩本 スキップつて言うよりは、走ってる。
水野 走ってるじゃん。
岩本 走ってるつて言うよりは、足引きずってる。
水野 どうなってるの。
岩本 気持ちが悪ね。
沼田 わかります。
水野 俺は、全然わからないです。
岩本 そしたら、水溜りの中に、何かが、浮かんで。
何だろ？何だろ？目か？目か？目だつて。
水野 状況の説明、下手すぎますよ。
沼田 へ。
水野 沼田さんも、興味のない相槌、止めた方が良いと思いますよ。
岩本 で、ちよつと濡れるの嫌だったんだけど、入って行って、

水位が腰位まであるのを表現

水野 それ、水溜りじゃなくて、沼とか池じゃないですか。
岩本 結構大変だったんだけど
沼田 岩本さん。
それつて、水溜りじゃなくて、沼とか池じゃないですか。
水野 俺言つたよ。
岩本 で、「がつ」と。
沼田 お。
水野 説明下手すぎますから。
岩本 で、やっぱり目だった。
あ、水溜りつて言つたのは、沼的なものな。
水野 もう、みんなわかってますよ。

岩本、水野、舞台中央
岩本、逆立ち。水野、支える
逆立ち、終了

水野 今、まともなこと言っていないと思うんですよね。

岩本 目玉を落としていった人のことを考えてみたんだ。
コンビニでおでんを買う人なのかなあって。

水野 どうでも良くないですか。

岩本 俺は買わないんだよ。

水野 知りませんよ。

沼田 俺は買いますよ。

岩本 そうなの。

沼田 ええ。

岩本 そうなんだあ。

沼田 ∴

水野 この会話、重要ですか。

沼田 でも、大根だけです。

大根以外は

岩本 本当。

沼田 ∴

岩本 本当に大根だけ。

沼田 ∴

水野 何のためのシリアスですか。

沼田 玉子も、

岩本 玉子、も。

沼田 こんにやくも、牛筋も、がんも、焼き豆腐も、厚揚げも、昆布巻きも買います。

水野 ほぼ全部じゃん。

なんで、最初に大根だけって言ったの。

岩本 この目玉の人はどうだったんだろう。

水野 コンビニのおでんって、そんなに重要なんですか。

岩本 そんなことはどうでも良い。

水野 どうでも良いんじゃない。

沼田 水野君。

要は、その目玉が見ていた景色と、岩本さんの見ている景色は違うってことだから。

水野 最初からそう言えば良いじゃないですか。

沼田 どうなんですかね、その目玉、知らない内に、落としちゃったものなんですかね。それとも、捨てていったんですかね。

岩本 どうだろうね。

僕もあるよ。自分の目玉を捨てたくなる時。

沼田　でも、目玉を捨てたつて、頭の中には残ってるわけですよ。
何の解決にもならないですよ。

岩本　目の前で起こったことを、手つ取り早く捨てたいんだから、そう思つても不思議じゃない
ですよ。

沼田　そうですね。

水野　その目玉の持ち主は、不便じゃないんですかね。

岩本　それは、持ち主じゃないとわからないよね。

水野　そうですね。

沼田　ちよつと思つたんですけど、コンビニのおでんの玉子なんですけど、鍋の底で焦げ目が付
いた奴が、上に浮かんでくると、目玉みたいじゃありません。

岩本　うわー。

もう俺買えないよ。玉子が目玉にしか見えないよ。

沼田　すみません。

岩本　もうー、沼田さん、勘弁してよ。

沼田　すみません。すみません。

水野　拾つてきたんだから、問題ないですよ。

岩本　∴

水野　沼で目玉拾つてくるくらいだから、おでんの玉子が目玉だつて、捨てるんじゃないですか。

岩本　∴

8

岩本、沼田、前が出る。水野を支える姿勢

水野　何ですか。

二人　∴

水野　俺は、最初からまともなことしか言つてないですよ。

二人　∴

水野　わかりましたよ。

水野、逆立ち

沼田　何で、まともなことを言つたら、逆立ちしなきゃいけないんですか。

岩本　逆立ちつてさ、結局、立ってないよね。
自分のことを、手で支えてるだけで、立ってないんだよ。
まともなことを言つた後つて、自分が凄いやな気がするけど、別にそれは、普段思つて
たことに気付いただけで、凄いやなことでも何でもないわけじゃない。
自分が何によつて支えられてるのか。
そういうことをさ、忘れないで欲しいなつて。

水野　この態勢で、真面目な話止めてくれませんか。

岩本　この「前向きになる会」はさ、基本後ろ向きな人が集まつてくるわけですよ。

沼田 はい。
岩本 後ろ向きな人間はさ、多分、人一倍、色んな人に支えられてるんだよ。
支えられてることを忘れないために、逆立ちをするんだ。
水野 放して。
沼田 支えてくれる人のことを忘れないために、自分を自分の手で支えるよ。
岩本 そういことだね。
沼田 なるほど。
水野 放せ。

逆立ち、終了

岩本 水野君、顔赤いよ。
水野 当たり前でしょ。
沼田 俺はさ、熱く生きている人に懂れるよ。
水野 あんた達のせいだろ。
岩本 思っただけとき。
記憶つてのはどこにあるんだろうね。
水野 脳でしょ。
沼田 目玉にあるのかもしれないですね。
岩本 ね。
どこにあるのかわかんないよね。
見てみようか。
沼田 良いですね。
水野 良いんですか。人の目玉を勝手に見て。
沼田 落ちてたんだから、そんなことは承知の上でしょ。
岩本 見てもらいたいのかも。
沼田 水野君は、興味無いの。
その目玉の持ち主が、何を見て、何に途方に暮れて、落としていったのか。
水野 ∴
沼田 俺はさ、隣の芝生が、青くて青くてたまらないタイプだから見たいよ。
だって、下衆なもの。
岩本 良いねえ。
俺も、下衆なもの。
沼田 下衆なもの。
岩本 下衆なもの。
水野 見たいです。
偽善でした。俺も興味津々です。
岩本 なんかさ、水野君つて、そういうところあるよね。
水野 何ですか。
岩本 最初に、人振る。

水野 良いじゃん、人間で。生物で。色んなこと、認めようよ。
はい。

岩本、目玉を入れる

岩本 うわ。お。 (等々、適当なりアクション)

目玉、取る

驚いた。

水野 岩本さんの説明が下手すぎて驚きますよ。

沼田 俺に見せてくださいよ。

沼田、岩本から目玉を受け取る

沼田、目玉を入れる

沼田、適当なところで、目玉を取り、二人の会話を聞く

沼田 へ。

水野 何が見えてるのか説明してくださいよ。

何ですか。(岩本に)

岩本 俺ってさ、自分では、持つてる男だと思うんだけど、どう思う。

水野 わかんないですね。

岩本 結構さ、悪いことしてきたんだけど、捕まったことないしね。

水野 そうなんですか。

岩本 あれ、動揺しないね。結構悪い人なんだよ。

水野 初めて会った時から、良い人だなんて思っていないですから。

岩本 なるほど。

この顔ってさ、整形してんだよ。

水野 そうなんですか。

岩本 整形しなきゃいけなかったんだよね。

水野 それはあれですか、警察に捕まった方が幸せって感じの悪いことですか。

岩本 まあ、そらだね。

水野 :

岩本 すごい、後ろ向きの人生でしょ。

水野 はい。

岩本 でも捕まらない。すんでのところで捕まらない。持つてるよね。

水野 逃げてるわけですからね。

岩本 そうでもないんだよ。

水野 整形までして。

岩本 整形さ、やっぱり嫌で、ほとんど変わってないんだよね。

鼻を少し高くして、
水野 あんまり高くなってないですよ。
岩本 二重にして。
水野 美容ですか。
岩本 おしまい。
水野 ほとんど変わらないでしょ。
岩本 最近、髪長めかな。
水野 それ以上の短さつてどれくらいですか。
岩本 持つてると思わない。
水野 そうかもしれないですね。
岩本 今日まさ、そう思った。
水野 何ですか。
岩本 結構ね、溜まつてたんだよ。
その中で、鼻事な引きだなくて。
水野 何ですか。
岩本 目玉の溜まり場つていうのかな、結構あつたの。
何個もある目玉の中から、よくその目玉を引き当てたなくて。
水野 ∴
沼田 そうなんですか。
岩本 そう。
沼田 俺も、後で拾いに行こう。
岩本さん、場所教えてくださいよ。
岩本 良いよ。
一緒に行こうか。
沼田 お願いします。
水野 全然話が見えないんですけど。
沼田 ほら。

沼田、水野に目玉を放り投げる

水野 ちよつと。

水野、目玉をキヤツチ

水野 じゃあ。

水野、目玉を入れる

沼田 岩本さんつて、整形してたんですか。
岩本 そうだね。

沼田 鼻、高くしたんですか。
岩本 そう。
沼田 シリコンとか入ってるんですか。
岩本 入ってる。
沼田 触って良いですか。
岩本 良いよ。

沼田、岩本の鼻を触る

沼田 へへ。
岩本 どう。
沼田 よくわかんないですね。
岩本 でしょ。
沼田 どうなんです、その鼻は、自分の鼻だっと思えるもんですか。
岩本 そりゃあそうでしょ。
沼田 疑問に思ってたんですよね。
整形つて、要は自分じゃなくなりたいつてことですよ。
岩本 美容でしょ。
沼田 現状の自分に不満だから、本来の自分じゃない、自分の持っていない、美を求めるつてこと
すよね。
岩本 まあ、そらだね。
沼田 どうなのかなつて。
他人の子どもみたいなものですよ。
岩本 なるほどね。
まあ、俺の場合は、好んで変えたわけじゃないからね。
沼田 なるほど。
岩本 俺は、この顔は、自分のものだっと思ってるよ。
沼田 ほとんど変わってないんですよ。
岩本 まあね。

水野、目玉を取る

水野 すみません。
沼田 あ、見た。
水野 はい。
岩本 すごいよね。
水野 はい。
あの、…
映ってるの、俺ですよ。
沼田 そうだね。

水野 俺ですよ。
岩本 水野君だね。
水野 誰の目ですか。
岩本 水野君が一番わかってるんじゃないの。
水野 彼女の目です。
沼田 やつぱりそうなんだ。
何かさ、愛されてるよね。
すごい見てる。
岩本 こういう風な愛情の確認ってのも良いね。
沼田 ぐらいでしょ。
プレゼントの箱明けたら、目玉入ってるって。
岩本 ちよつとした脅迫だね。
水野 どういうことですか。
岩本 何が。
水野 何で。
岩本 俺って引き強いよね。
水野 そういふことじゃなくて、
落ちてたんですか。
岩本 落ちてた。
水野 彼女、目ありますよ。
岩本 それは、俺は知らない。
水野 俺の彼女に何かしたんですか。
岩本 会ったこともないよ。
水野 どういうことですか。
岩本 ……さあ。
水野 これは、一週間前に会ったときですよ。
岩本 そうなんだ。
水野 昨日も普通に目はありましたよ。
沼田 昨日も会ってたんだ。
水野 どういうことですか。
岩本 俺に言われてもね。
沼田 生えてきたんじゃないの。
水野 目って生えるんですか。
沼田 俺取ったことないから、わかんない。
さつき取ったのか。
岩本 生えそうだよ。
沼田 生えそうですね。
必要ですもん。
岩本 どうした。
水野 あ、いや。

沼田 さすがに動揺するよね。

水野 :はい。

岩本 何か、ごめんね。

水野 :いえ。

岩本 見たくなかったかな。
特に問題ないかなって。

水野 いえ。

すみません、ちよつと。

沼田 当たり前じゃないですか。

岩本さんが、水野君の立場だったら、動揺するでしょ。

岩本 するね。

水野 帰っていいですか。

岩本 良いよ。

水野 すみません。お先します。

水野、退場しようとする

岩本 水野君。

水野 はい。

岩本 どうなんだろう。拾ってきて、責任も感じてるんだけど、
今は、どんな気分なんだろう。

水野 :良く分かりません。

岩本 そうだよな。

前向きなのかな。後ろ向きなのかな。

水野 :わかんないですね。

岩本 だよな。

じゃあ、お疲れ。

沼田 お疲れさま。

水野 お疲れ様です。

水野、退場

沼田 水野君。次来ますかね。

岩本 来ないんじゃないかな。

沼田 絶対に、うちに気遣ってましたよね。

岩本 やつぱりそう思う。

沼田 明らかに前向きだったでしょ。

岩本 そうだよな。

また減るのか。

沼田 岩本さんのせいじゃないですか。あんなもの拾ってくるから。
岩本 落ちてたんだもん。
沼田 まあ、良いんじゃないですか。
みんな前向きになってんだから。
そういう会でしょ。
岩本 そうなんだけども。
沼田 うちらが映ってる、目玉落ちてないですかね。

岩本、ポケットから目玉を出す

岩本 じゃくん。
沼田 え、それ、俺映ってるんですか。
岩本 はつきり言うけど、もつと後ろ向きなるよ。
沼田 …だよな。
俺、そんな生活しか送ってないですもん。
岩本 見る。
沼田 岩本さんは見たんですか。
岩本 見た。
沼田 家持って帰って、見ていいですか。

岩本、沼田に目を放り投げる

岩本 じゃあ、俺、帰ろうかな。
沼田 あれ、今日は何もしないんですか。
岩本 そんな気分じゃないでしょ。
沼田 まあ、そうですね。
岩本 前向きな人を、見れば見るほど、後ろ向きなる。そういうタイプの人間でしょ、うちらは。
沼田 そうですね。
あ、今結構、まともなこと言っていましたよ。
岩本 あ〜。
あれね、実は、二重にしたとこがね、ひくひくするんだよ。で、逆立ちすると、落ち着く。
沼田 は。
岩本 なんか、タイミング的に重なって、そういうしきたりみたいになっちゃった感じ。
沼田 意味ないんですか。
岩本 俺にとっては、意味はある。
沼田 なるほど。
岩本 じゃあ、俺帰るよ。
沼田 あ、帰る前に、もう一回、鼻触っていいですか。
岩本 …良いよ。

沼田、岩本の鼻に触る

沼田 ありがとうございます。

岩本 いつでもどうぞ。

多分、沼田君にとって、意味があるんだろうから。

沼田 ……そうですね。

岩本 じゃあ、お疲れ。

沼田 お疲れ様です。

岩本、退場

沼田 夜中に目を覚ます。冷たい空気が部屋に居座っていて、自分と部屋の温度の違いにたじろぐ、自分の鼻先が妙に冷たくて、ああ、ここが部屋と僕の境界線何だと実感して、僕は冷たくなった鼻先を嬉しく思いながら、また眠りに就く。

ふと思う。僕は本当に眠っているのだろうか。

この状況はいつから続いているのだろうか。

僕は今、ベットの上にいるのか、それとも立っているのか。逆さになっているのか。

上も下も、右も左も分からない。

身体と実感しているものは、身体なのか。

朝日に気付くこともなく、埋もれるように眠っているうちに、部屋の温度は上がり、冷たくなった僕の鼻先は、いつの間にか部屋と交わりだす。

僕は意識を取戻し、目を覚ましたことを認識する。

僕は今、ここにいる。

音楽

沼田、目玉を握りつぶして、床に落とす

沼田、退場

舟

音楽

照明、舞台全体

舞台上、パイプ椅子が積み上げられている

パイプ椅子の前に、ゾルが立っている

ゾル 夜中に目を覚ます。単純な理由だ。トイレに行きたいと思う。ビールを飲み過ぎたせいだ。しめに食ったラーメンが鼻から出てきそうな違和感を感じる。ネギでむせた時の麺が、鼻と口の間にあるのだろう。部屋の空気が冷たいので、トイレに行くことを躊躇う。ふと、先ほどまで見ていた夢を思う。いつもの夢だ。夢にまで見る後悔というのは、どうやって解消すればいいのだろう。どれだけ後悔してしようが、人生は進んでいき、あの時と同じような状況はあつても、同じ状況は二度とない。あの夢を見なくなる日は来るのだろうか。それ以上の後悔をすればいいのだろうか。それ以上の達成感を得ればいいのだろうか。夢の最後で、トイレに行つて用を足していたことを思い出す。俺の勝脱はそこまで来ていたのである。俺は、冷たい空気を切り裂いて、トイレに行くことを決意する。俺は今、トイレに行く。

将軍、博士に羽交い絞めにされ、引きずられるように登場

ゾルの台詞中も、抵抗しており、その声は聞こえる。ゾルは、負けじと、どんどん大きな声で台詞を入れていく

将軍 放せ。放せ。
何だつてんだよ。放せよ。
ゾル ようやく来たか。
ようこそ、我がアジトへ。

将軍と博士、まだもたついている

将軍 放せ。放せ。

ゾル 何も恐れることはない。
むしろ喜ばしいことだ。
なぜなら、君は、選ばれたのだから。

将軍と博士、まだもたつている

将軍 放せ。放せ。

博士 うん、うん。

ゾル もういい加減入つて来いよ。

将軍 ∴

博士 ∴

将軍 な。いい加減入つて来いよ。

いつまでもたつてんだよ。

博士 申し訳ありません。

ですが、全力で抵抗されると、意外に思った様には動いてくれないもので。

ゾル 上手いことやれよ。

将軍 放せ、放せ。

ゾル お前も、諦めて入つて来いよ。

全力で抵抗しても、基本捕まったままだし、もうどうにもならない距離だから。
抵抗するなら、ある程度諦めつつ、抵抗しろよ。

ゾル、将軍と博士を舞台上へ

もみあいながら、倒れるように舞台上へ

ゾル ようこそ、我がアジトへ

将軍、立ち上がり、逃げようとする

それを阻止する博士

将軍 何なんだよ。俺は二次会に行くんだよ。

博士 二次会がここだと思えばいいだろ。

将軍 みつちちゃんを、俺は口説くんだよ。

博士 俺らがお前をこれから口説くから。

将軍 何でお前らに口説かれなきやいけないんだよ。

博士 良いから。

将軍 俺は同窓会を楽しみにしてたんだよ。

博士 俺だって楽しみにしてたよ。

将軍 みつちちゃん、独身だって聞いたから。

一次会でみつちちゃんと良い感じだったんだよ。

博士 俺も見てたけど、そんなことなかったよ。
完全に、距離取ってたよ。

将軍 俺はみつちちゃんと

ズル、二人を止める

ズル うるさい。

諦めるよ。

な。もう諦めるよ。

博士、お前も、どうにかしろよ。お前の方が身体でかいんだから。

博士 申し訳ありません。

将軍、立ち上がり、逃げようとする

阻止する博士

将軍 みつちや〜ん。

博士 無理だつて。

将軍 みつちや〜ん。

ズル、二人をわける

ズル 落ち着け。

な。みつちやん呼ぶから、ちよつと落ち着け。

博士、みつちやん呼んできて。

博士 しかし、

ズル 良いから。みつちやんも連れてきて。

博士 みつちやんというのは、ミツオ君でしょうか。

ズル そんなわけないだろ。

ミツオ君呼んで来てどうするんだよ。

道子ちゃんだろ。

将軍 美奈子ちゃんだよ。

博士 俺も美奈子ちゃんだつて思っていました。

将軍 道子ちゃんつて誰だよ。

博士 道子ちゃんは、∴知らねえよ。

将軍 道子ちゃんつて誰なんだよ。

博士 俺に聞くなよ。

ズル 俺が間違えたんだよ。

な。俺が間違えたんだよ。

多分、想像してる子は一緒だよ。美奈子ちゃんだよ。間違えたんだよ。

いいから、みつちやん、呼んでこいよ。

博士 しかし、
将軍 呼んで来いよ。そしたら、いてやるよ。
博士 なんだよ、その態度は。
将軍 は。
博士 なんなんだよ、てめえのその態度はつて言つてんだよ。
将軍 なんだと、こら。

二人、もみ合う
ゾル、分ける

ゾル 何なんだよ、何なんだよ。
もう少し俺に主導権握らせるよ。

博士 申し訳ありません。
ゾル 良いじゃん、道子ちゃん呼んで来いよ。
将軍 美奈子ちゃんだよ。
ゾル 美奈子ちゃんだよ。
良いじゃん、呼べよ。仲間は多い方が良いから。

博士 しかし、
将軍 呼んで来いよ。
博士 何だと、こら。
将軍 てめえこそ、何だ。
博士 はあ。
ゾル 待て〜。…待て〜。…待て〜。

主導権。
何か理由があるのか。みつちゃんを呼べない理由があるのか。
将軍 美奈子ちゃんだよ。
ゾル だから、みつちゃんつて呼んだら。な。間違えないように、みつちゃんつて呼んだら。

将軍 ：
ゾル 博士、言え。何か理由があるのだら。
将軍 言えよ。
博士 何だこら。
将軍 言えよ。
博士 何だ、てめえ、酔つてんのか、喧嘩売つてんのか。
将軍 両方だよ。
博士 飲んでたもんな。
ゾル 俺に主導権。
博士 申し訳ありません。
ゾル 言え。
博士 実は、みつちゃんと私、できてます。

将軍 え。
博士 できてます。
将軍 マジで。
博士 マジで。
将軍 え、一次会、結構良い感じだったよ。
博士 気のせいなんだよ。
将軍 良い感じだったよ。
博士 俺にメール入って、妙に寄ってきて、気持ち悪いつて。
将軍 いやいや、そんなことはないよ。
博士 だから言ったじゃん。距離取ってるって。
将軍 身も心も。
博士 身も心も。
将軍 ええ。
博士 だから、ある意味、二次会はいかない方が、傷も浅くて済んだって。
将軍 もう十分えぐられたよ。
マジか。
ゾル 集まってもらったのは、他でもない。
私は、現在のこの世界を憂いている。
将軍 え、いつから。
博士 半年くらい前から。
将軍 マジで。
博士 ∴
将軍 ええ。
ゾル 聞けよ。
な、俺の話聞けよ。
将軍 ∴
ゾル 私は、この世界を憂いている。
秩序は乱れ。生きる目的を考えるとなく、人は好き勝手に生きている。
将軍 何で言わなかったの。
博士 すまん。
将軍 友達じゃん。
博士 逆に言えなかった。
ゾル 話聞けよ。
な、お前らが、好き勝手過ぎるんだよ。
博士 私もですか。
ゾル 当たり前だろ。
博士 私は、こいつに話しかけられたから、答えたまでで。
ゾル 結果的に、邪魔してんだよ。
将軍 俺もですか。
ゾル お前だよ。元凶はお前なんだよ。

俺に話させる。

ゾル 私は、この世界を憂いている。
秩序は乱れ、生きる目的を考へることなく、人は好き勝手に生きている。
だからこそ、私は立ち上がった。

将軍、立ち上がる

ゾル 良いよ、立ち上がらなくて。

将軍 ∴

ゾル 私は、立ち上がった。

博士、立ち上がる

ゾル 立つな。つて。もう、お前は立ち遅れてんだよ。

博士 ∴

ゾル かく言う、この私も、つい最近まで、何の目的もなく、生きていた一人だ。
お前の生きる目的は何だ。

博士 とりあえずは、みつちちゃんを幸せにしようと思つてます。

ゾル ∴

将軍 そこは、目的言つちや駄目なんじゃないか。

博士 でも、そら思つてるし。

将軍 うわー、ラブラブじゃん。

ゾル お前は生きる目的を失つている。

この私とともに

将軍 自分は、こいつからみつちちゃんを奪い返し、みつちちゃんを悪夢から目覚めさせてやりませう。

博士 何でだよ。

将軍 ありがとう。俺に目的を与えてくれて。

博士 みつちちゃんは俺として幸せなんだよ。

将軍 俺といた方が幸せになれるんだよ。

ゾル 違ふ。違ふ、違ふ、違ふ。

お前も、お前も、生きる目的ない。

二人 ありますよ。

ゾル ないんだよ。考へてもいないんだよ。

な。

二人 ∴はい。

ゾル お前らが、目的だと言いきつた、さつきのことも、きつと近いうちにあいつに盗まれるだ
らう。

共に、あいつを捕え、我々を、取り戻せう。

博士 は。

ゾル 博士、説明してやれ。
博士 は。
単刀直入に言う。ゾル総統がおっしゃった、「あいつ」とは、サルだ。
将軍 サル。
博士 サルだ。
総統。

総統、かなり気合の入った、サルの物真似

ゾル お前やれよ。
博士 サルは総統に言った。
サル顔だよな。

博士の台詞聲で、ゾル、サルの物真似

ゾル そこはいらんと思う。
博士 さらに続けてこういった。お前から、少しずつ奪って行ってやる。
少しずつ、少しずつ、お前から、奪い取ってやる。
将軍 何を奪うんだ。
博士 お前から、奪い取った後、お前には何が残る。
器だ。器しか残らない。お前は、ただたださまよう器になる。
少しずつ、少しずつ、お前は、お前らではなくなるのだ。
将軍 だから何を奪うんだ。
博士 何故奪うって、お前らは必要としてないから。
いらんものを奪って、何が悪い。
我々は欲しているのだから、欲している我々が持つて、当たり前ではないか。
将軍 だから何を奪うんだ。
博士 お前らは、我々を止める術を知らない。
なぜなら、お前は、失ったことにすら気づかないからだ。
将軍 だから何を奪うんだ。
博士 ∴
何か。
将軍 何かか。(納得)
ゾル 何で納得できたの。
将軍 何かサルの奪われるのか。
博士 ああ。
将軍 何かを守らなきゃいけない。
博士 そうだ。
ゾル 待て。
ノリで会話するのをやめろ。今の説明で普通納得しないだろ。

俺が言う。奪われるものは、人の存在価値。記憶、名前、大切にしているもの。そういうものだ。

将軍 サルが。

ゾル サルがだ。

将軍 何故。

博士 お前最近、サルの夢を見なかったか。

将軍 …見た。

博士 遅かったか。

ゾル 私もそうだった。

夢にサルが出てきて。

もらっていくよ。つて。

将軍 何を奪われたんですか。

ゾル 私の本名は、ゾルではない。…ゾルではないんだ。…名前を、名前を奪われた。私の名前は何だったんだ。思い出せない。

それが始まりだった。

次々と私は奪われていった。生活習慣、記憶、歯ブラシ。

将軍 歯ブラシ。

博士 たまたま俺が、総統とキャバクラに行く約束をしていて、俺が総統を迎えに行った時には、既に記憶が失われていた。

俺は総統の金を期待していたから、所持金もほぼ無く、その日はキャバクラに行けなくなった。

将軍 みつちちゃんと別れる。

博士 俺はその後、金が惜しいから、忘れたふりをしているのかと思って、総統と話したんだ。本当に記憶が失われていた。

完全に抜け殻だった。

唯一覚えていたのが、サルの、もらっていくよだ。

それを手掛かりに俺は、様々な文献、聞き込み調査を行って、サルにたどり着いた。

ゾル 最初の頃、私は、本当に人という器でしかなかったが、博士が根気強く私と話をしてくれただおかげで、ここまで回復することができた。

将軍 サルにそんなことができるのか。

ゾル 私は憂いている。

私の様な人間が増えていくことを。

だから私は立ち上がった。

私は私を取戻し、私の様な人間をこれ以上増やさないためにも、サルを捕えるんだ。

将軍、帰ろうとする

止める、博士

もたもたする二人を分けるゾル

博士 どこいくんだよ。

将軍 今の話をどう信じれば良いんだよ。
博士 信じられないかもしれないけど、事実なんだよ。
将軍 信じられるわけないだろ。
博士 サルの夢を見ただろ。
将軍 見たけど。
博士 貰っていくよって言われたら、終わりだぞ。
将軍 そもそも、それが嘘くさいだろ。
なんだ、もらっていくよ。って。
ゾル 違う。
もらっていくよ。な。
将軍 どっちでも良いよ。
博士 貰っていくよって言わたら終わりなんだよ。
将軍 何となくだけど、要は、こいつが、何の目的もなく、だらだら生きてるから、狙われたんだろ。
俺はそうじゃない。
毎日毎日、仕事に励んで、仕事が終わったら、パチンコに行き、晩酌の第3のビールを1
1ルにしたい。って目標を持ちながら、晩飯を食ってる。
そういう、しっかりとした生活してるんだ。
お前の憂いとは真逆なんだよ。

将軍、帰ろうとする
止める博士
もたもたする二人を分けるゾル

ゾル なんで、お前らそんなに拮抗してんだよ。
お前の言い分は分かった。
だが、協力してもらわないと困る。何としても、サルを捕えるんだ。
将軍 だから、言つたる。
俺は、仕事が終わったら、パチンコに行つて、勝ったらキヤバクラで飲む。そういう目的
を持つてるって。
確かに猿の夢は見たけど、それは、温泉に入ったら、サルがいて、ニンジン食つてた。
全然、話しかけてる素振りもなかったし、俺が狙われることはないんだよ。
博士 お前が狙われるんだよ。
将軍 何で。
博士 サル顔だから。
将軍 ∴
博士 お前がサル顔だからだよ。
将軍 俺が、サル顔。
ゾル サル顔の方が、サルとシンクロしやすいらしい。
私も、サル顔だ。

将軍 俺が、サル顔。
博士 調べたところ、まず最初に、サル顔の人間から狙われる。
将軍 はは、ははは、はははは。
俺がサル顔。俺がサル顔。
博士 はつきりと言いたくはなかったんだが。
将軍 うすうすは、気付いてたよ、俺がサル顔だつて。
なるほどな。サル顔の方がシンクロしやすい。
理にかなってる。
でも、ちよつと待てよ。
だったら、お前は何で、こいつに協力してんだよ。
何でそこまで親身になってんだよ。
お前が狙われるのは、相当後になるたる。
博士 みつちゃんもサル顔たる。
将軍 ∴
博士 みつちゃんもサル顔たる。
可愛いけど、サル顔たる。
将軍 ∴
ゾル 因果なものだな。
博士の周りには、サル顔の奴が多いんだ。
博士 行きつけのキヤクラの、お気に入りの子もサル顔なんだ。
将軍 サルは、強くなるんですか。
博士 俺が調べたところによると、最初は目的も何もなく生きている奴から狙って、色んな物を
吸収して強くなって、最終的には、無差別に貰っていくよくだ。
ゾル 俺は、今でこそ、こうやって、サルを捕えるために、背筋ピーンって生きているが、サル
に奪われる前は、相当な駄目な奴だった。
博士 総統は、二代目のボンボンで、我々の良い金臺だった。
おだてておけば、調子に乗って、最高に扱いやすいやつだった。
将軍 ∴
徐々に強くなるのか。
博士 ああ。
ゾル 今、取り戻さない方が良いつて、一瞬思わなかったか。
将軍 そんなことないです。
つまり、しっかりしてるみつちゃんでも、その内ターゲットになってしまうと。
博士 そういふことだ。
将軍 しかもサル顔。
博士 結構、早いだろな。
将軍 どうやって、サルを捕まえるんですか。
ゾル 協力してくれるのか。
将軍 さつきまで、みつちゃんに言い寄ってたのも何かの縁だ。
気持ち悪いつて言われてたらしいけど、協力しましょう。

ゾル ありがとう。
君には、将軍の称号を与えたい。
将軍 それは、いらない。
で、どうするんです。
ゾル 博士。
博士 は。

博士、パイプ椅子を持ってくる

博士 将軍、お前には、ここで寝てもらおう。
将軍 ここで。
博士 ああ。サルは、大体、夢に出てきて、寝ている間に、奪っていくんだ。
ゾル 夢の中で、もらって行くよ。が出たらアウトだ。
博士 だから、将軍の夢にサルができたところを掴まえる。
将軍 どうやって。
博士 網だ。
将軍 網。
博士 網で、捕える。

ゾル、網を持ってくる

ゾル 完璧な計画だ。
さ、寝るんだ。
将軍 ちょっと待ってくれ。
どうやって、俺の夢の中にサルが出てきたことを知るんだ。
博士 この椅子は、特別な作りになっていて、夢の中にサルが出てくると、右手が上がるようになっている。
将軍 この椅子が、特別。
博士 ああ。
ゾル さ、寝るんだ。
将軍 はあ。
ゾル 決して、サルに心を開くんじやないぞ。
我々が捕えるまで、戦って、時間を稼ぐんだ。
将軍 …はい。
言っておくが、俺は、みっちゃんのためにやるんだからな。
博士 わかっている。だが、みっちゃんは俺のものだ。
将軍 ああ、だから、サルを捕まえた暁には、キャバクラのサル顔の子を紹介してもらおう。
博士 わかった。
ゾル 金は私が出そう。

将軍、椅子に座る

見守る二人

将軍 寝れないよね。

ゾル 寝るんだ。

将軍 思うんだけど、サルが出てきたら、右手上げることが出来るんだっつら、同時に、すぐ寝れるような改造すべきだと思っただよ。

博士 それは、できなかつたんだ。

将軍 チャレンジはしたんだ。

博士 所詮、俺は素人レベルだ。

ゾル 頑張つて、寝てくれ。

将軍、椅子に座る

見守る二人

ゾル 寝たのか。

博士 寝息を確認してみますか。

ゾル、将軍の顔に顔を近づける

ゾル … (駄目だ)

将軍 寝れないよね。

今、顔近づけたでしょ。

ゾル 寝息の確認だ。

将軍 寝れないよ。

博士 わかった、何か対策を考えよう。

引き続き、寝る努力をしてくれ。

将軍、態勢を変える等、寝る努力。

博士 総統。子守唄でも。

ゾル わかった。

ゾル、ギザギザハートの子守唄を歌う

博士 総統、それは、ちよつと違います。

しかも、何で、そんな声小さいんですか。

ゾル 歌はあまり自信がない。

博士 でも、ちよつど良いポリエームかもしれません。

違う歌を。

ゾル、シユーベルトの子守唄
将軍、寝る

博士 寝ました。

ゾル 寝たか。

博士 あ、起きそうです。
もう少し歌ってください。

ゾル、シユーベルトの子守唄

博士 とても長い顔をして、寝ています。
後は、右手を上げるのを待つだけですわね。

ゾル ああ。

博士 絶対に、私の名前を返してもらわう。
総統、眼球がぐるぐる動いています。
ぼちぼちかと。

ゾル、網を持って構える
将軍、右手を上げる

博士 今です。

ゾル、網で捕える

ゾル 入ったぞ。

博士 こっちへ。

博士が用意していた袋に網ごと入れて、口を縛る

ゾル 捕まえたぞ。

博士 やりました。
将軍、起きろ、起きろ。

将軍 ∴

ゾル 捕まえたぞ。

将軍 ありがとう。将軍、君のおかげだ。

将軍 サルが、
暗闇の中に、サルが出てきた。
この前、温泉で一緒になったサルだった。
ぬるま湯、気持ち良かったねって。

ああ、そうですね。温めのお湯っていつまでも浸かっていたいですよね。って、俺言ったんだよ。

そしたら、急に牙をむいて

俺の生活を、キヤバクラ通いを、散々揶揄しやがった。

それだけじゃない、俺の仕事を、習慣を、人生を、意味がないようなことを言いやがった。

でも、だんだん、俺は、自分がいない人間なんじゃないかって思うようになっていつて
∴。

多分、そんなんじゃないかな。って。

10年前は、20年前は、30年前は、…そんなんじゃないかな。って。

いつの間にか、諦めちやがった。

そしたら、生まれたころに戻りたいって、何もなかったころに戻りたいって、何もいらな
いつて。

博士、将軍をびんた

博士 キヤバクラ、行こうぜ。

ゾル 金は私が出す。

将軍 そうだな。

∴

サルは、サルは、どうなる。

博士 どうもしない、サルはサルだ。

ゾル 盗ったものは、返してもらっけどな。

博士 じゃあ、行くか。

行きましょう。

ゾル 俺は、着替えてから行くよ。

博士、将軍退場

退場しながら

将軍 サル顔の子、紹介してくれよ。

博士 わかったって。

ゾル、舞台中央に立ち、達成感に満ちて

ゾル 夜中に目を覚ます。単純な理由だ。トイレに行きたいと思う。ビールを飲み過ぎたせいだ。

しめに食ったラーメンが鼻から出てきそうな違和感を感じる。ネギでむせた時の麺が、鼻
と口の間にあるのだろう。

部屋の空気が冷たいので、トイレに行くことを躊躇う。

ふと、先ほどまで見ていた夢を思う。

いつもの夢だ。夢にまで見る後悔というのは、どうやって解消すればいいのだろう。

どれだけ後悔してしようが、人生は進んでいき、あの時と同じような状況はあっても、同じ状況は二度とない。

あの夢を見なくなる日は来るのだろうか。それ以上の後悔をすればいいのだろうか。それ以上の達成感を得ればいいのだろうか。

夢の最後で、トイレに行つて用を足していたことを思い出す。

俺の膀胱はそこまで来ていたのである。

俺は、冷たい空気を切り裂いて、トイレに行くことを決意する。

俺は今、トイレに行く。

音楽

照明、暗転

了